

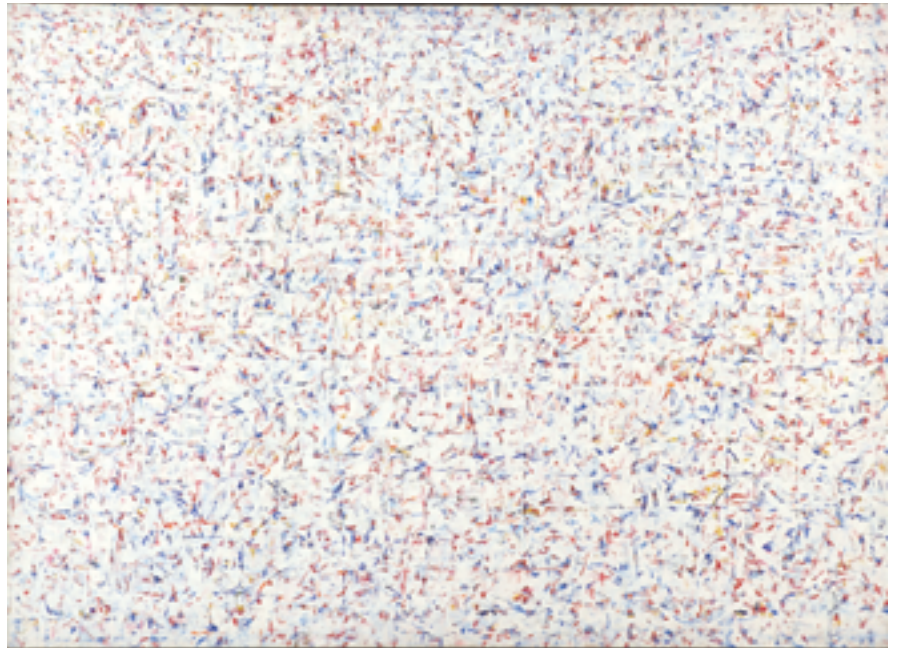
news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



元永定正《無題》1967（昭和47） アクリル絵具、キャンバス 「日本の絵画の50年」展より

日本の絵画の五十年



宇佐美 圭司 (1940 - 2012) 《還元 No.6》1963 (昭和 38)
油彩、キャンバス / 135.0×184.8

当館の前身である和歌山県立美術館が設置されたのは1963(昭和38)年のことだった。今年はそのから50年を迎えることとなる。県立美術館はその後、1970(昭和45)年には近代美術館と博物館に分かれ、近代美術館は県民文化会館の1階に新たに開設されて20年余り活動した後、1994(平成6)年、黒川紀章設計による現在の建物に移転したのである。美術館としての活動を続ける中で、展覧会を開催し、作品の収集にもつとめてきたが、県立美術館の設置初年度に5点であった収蔵作品は、現在1万点を超える数となっている。

この展覧会は、美術館が設置されてから50年を迎えることを契機に、この半世紀にわたって日本で描かれた絵画の展開をコレクションから追ってみようとするものであった。

なぜ絵画なのか。

ある時代の芸術表現を顧みようとするならば、ジャンルを限定することは、視野を限定してしまうことに他ならない。絵画と限定することで立体作品、彫刻作品は視界から一旦外れ、更に平面という意味では、現代において特に重要な領域であり、当館のコレクションを特徴付けるものでもある版画や、写真による作品も除外することになる。だがそれは、そういった作品について考慮しないという不十分な立場に身を置くこ

とではなく、逆に扱う対象を絵画のみに絞ることによって、この半世紀という時代を覆った芸術観なり美術の流れなりを、端的に見ることができるのではないかと考えたのである。

様々な形で制作される芸術の中でも、絵画は彫刻とともに中心的な位置を占めるものと一般的にはとらえられているのではないだろうか。俗に言う「絵描き」という言葉が、ほとんど芸術家と同義語のように用いられるのも、それゆえであると思われる。だが、この50年間はもちろんのこと、100年ほど前から絵画は厳しい立場に立たされてきた。幾度となく「絵画の死」が取り沙汰され、復活やら復権やらが繰り返されているのである。

まさに1963年は、読売アンデパンダン展を中心に反芸術と呼ばれる動向が一つの頂点に達し、翌年は展覧会自体が中止されるに到った時期に当たっている。そのような動向の中で制作の中心を占めたのは、ガラクタのようなオブジェだった。

あるいは写真が発明された時、ある画家は絵画の死を宣告したという。だが平面にある画像を定着させる技術としての写真と絵画の共通性は、絵画を死に至らしめるより、むしろその意義を問い直し、印象派の誕生から抽象表現の追求につながる新たな表現を生み出

す契機ともなったと言えるだろう。

現代における絵画のみならず芸術の存在について、大きな問題提起を行ったと考えられるマルセル・デュシャンが絵画を放棄したとされることも、絵画の死を巡って大きな意味を持つと考えられた。ちょうど100年前となる1913(大正2)年、既に絵画を放棄しようとしていたデュシャンは、最初のレディ・メイド作品と言われることになる《自転車の車輪》を作っている。一方、アメリカではヨーロッパの最新の動向を紹介した展覧会となったアーモリー・ショーが開かれ、皮肉にもデュシャンは絵画作品である《階段を降りる裸婦 No. 2》によって作者不在のまま大きな注目を集めたのであった。デュシャンはその2年後に渡米するが、絵画どころか芸術制作からも離れたような態度をとったことで芸術家として重視されるという逆説的な存在になっていく。1918年にパトロンであったキャサリン・ドライヤーからの注文によって一点だけ絵画を描いているが、その題名《Tu m'》は、今さら絵画を注文してきたドライヤーに対して、「おまえは私をうんざりさせる」という意味を持つとする説もあるほどである。絵画への一種の憎しみが、芸術家のあり方として認められるという現象をここに認めることができるだろう。絵画のみならず芸術を放棄したかのような態度を取っていつ

たデュシャンであるが、しかし現実には誰の目にも触れないよう密かに作品の制作を続けており、没後発見されたその《遺作》は、扉によって隔てられた立体的な仕掛けをのぞき見することによって、ある光景が絵画的にあらわれてくるものでもあった。

デュシャンは、その作品のみならず言葉から行動までが、現代の美術にとっての大きな参照点としてとらえられてきた。もちろんデュシャン一人が芸術家なわけでもなく、多くの芸術家が多彩な作品を生み出し続けているのであるが、一方で芸術とりわけ絵画に対して不可能が語られ、ほとんど憎しみに近い感情が表明されてきたのもまた、現代の芸術についての状況であった。

繰り返し表明された「絵画の死」は、新しい表現の新しさを保証するものとして唱えられたものではない。そうであったならばむしろことは簡単で、古い絵画は死に、別の新しい表現がここにあると言うだけで済む。古いとされたものを終わったものとして記録し、新しいものを認めて称揚すればよいのだ。新しい表現が古い表現を倒した故に絵画は死んだのではなく、絵画、あるいは絵画によって代表される芸術そのものが不可能ではないかという認識が現代の美術を基礎づけており、それ故に絵画は死を宣告されながら描き続けられているのである。例えばアドルノの「アウシュビッツ以後、詩を書くことは野蛮である。」という警句に端的に言い表されているように、文化や文明といったものの成立自体が既に野蛮なものとして現れてしまったのが20世紀なのであり、芸術は芸術の否定から出発せざるを得ない。

この展覧会で扱う、過去半世紀に生み出された日本の絵画作品も、そのような芸術の不可能性と対峙しながら、別の可能性を探究してきたものと見ることができる。展覧会では1950～60年代、1970～80年代、1980年代以降と年代ごとに表現の特徴を抽出し、対象の描写を放棄し、作品を形成する素材の物質性を前面に提示しようとする作品の登場を出発点に、物質、還元、記号、表象などの主題によって整理してみた。もっとも90年代後半頃から、このような整理の枠を超えた表現が、大きな流

れとなっているようにも思われる。

また、この展覧会は当館のコレクションの充実を示す反面、未だ収集されざる作品が存することも明らかにする。たとえば近年評価著しい草間彌生の網目の絵画作品をはじめ、高松次郎の影、河原温の日付絵画など、戦後の日本を代表する作品が多々思い浮かぶ。また具体美術協会に参加した作家の作品は相当数収集できているが、リーダーであった吉原治良の作品は未だコレクションに加えられていない。まさにこの展覧会の会期中に、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で大規模な具体の回顧展が開催され、それにとまらぬ評価の高まりが価格にも反映していることが伝えられた。評価が高まることは喜ばしいが、収集という面からは言えばハードルもまた高くなっているわけである。

そのハードルをクリアして更に収集作品の充実を図り、新たな美術の見取り図を描くような展覧会の開催が、美術館の将来への課題でもある。(奥村泰彦)



妻木 良三 (1974 -)
《境界 E-II》2011 (平成 23)
鉛筆、ケント紙 / 101.0 × 72.0



白髪 一雄
(1924 - 2008)
《平治元年十二月二十六日》
1966 (昭和 41)
油彩、キャンバス
273.0 × 363.8



館 勝生
(1964 - 2009)
《September. 1. 2008》
2008 (平成 20)
油彩、キャンバス
130.3 × 194.0

「版画・図版・オブジェ」

3月9日から5月19日まで開催した「版画・図案・オブジェ」展では、版画の特長である複数性や実用性、境界性に着目し、版画による図案や挿画本、さらにはブック・オブジェを特集しました。

はじめに展示したのは、創作版画の草創期に忘れられない存在の香山小鳥(1892～1913)と田中恭吉(1892～1915)による蔵書票です。自刻木版への関心は香山から始まって田中に伝わったのですが、彼らが木版画を手がけ始めた時、それぞれがまず試みたのは小さな絵葉書や蔵書票でした。絵葉書に木版を用いれば、親しい仲間たちに同じ絵を送ることができ、蔵書票は書架に集まった本に貼り込んでそれらが自分の愛蔵書であるしるしにできます。それは版画の複数性と有用性を楽しむ最も身近な形といえるでしょう。

『とりで』や『黙鐘』といった雑誌の表紙にも、やがて工芸家として知られるようになる富本憲吉(1886～1963)や河合卯之助



香山小鳥《蔵書票》
1912年 木版 当館蔵



田中恭吉《蔵書票》
1914年 木版 個人蔵



富本憲吉《『とりで』第2号 表紙》
1913年 木版 当館蔵



河井卯之助《『黙鐘』第1巻第6号 表紙》1915年 木版 当館蔵



藤森静雄《『新潮社出版月報』表紙図案》1920年代 木版 当館蔵



藤森静雄《新潮社封筒図案》
1923年12月14日 木版 当館蔵



藤森静雄《『文章倶楽部』表紙図案》
1927年6月15日 鉛筆・水彩 当館蔵



恩地孝四郎『海の童話』より 1934年 当館蔵



『海の童話』本文の透かし

(1889～1969)が自刻の木版画を寄せています。1910年代前半、若い作者たちが制作したこれらの作品は、自己表現の手段としての版画が生まれた瞬間をよく表している、素朴な魅力にあふれています。

藤森静雄(1891～1943)が1920年代に手がけた木版による図案は今回、初公開となったものです。これらは一昨年に開催した「生誕120年記念 恩地孝四郎・藤森静雄」展に合わせて藤森静雄のご子息、素彦氏から寄贈していただいた約300点の藤森静雄旧蔵品に含まれていたものです。三角刀による鋭い線や、唐草模様が特長的です。藤森の盟友、恩地孝四郎が装丁や出版の仕事をしたことはこれまでよく知られてきましたが、文学書の出版で知られる新潮社の出版月報の表紙や封筒図案まで手がけている様子から、藤森もまた装丁にかなり関わっていたのではないかと推測されます。寄贈いただいた作品の中には、やはり新潮社刊行の『文章倶楽部』表紙図案もありました。その文字の形や模様を見てみると、昭和初期の円本ブームを代表する新潮社の世界文学全集の装丁をした恩地

孝四郎が自分の仕事を振り返って「字は黒、僕の字でないがいい字だつた」(恩地孝四郎「自作装本選」『本的美術』誠文堂新光社、1952、p.121)と述べている「いい字」は、藤森の手になるものだったのではないかと想像してみたくになります。今後さらに調査を進めたいところです。

藤森の旧蔵品には、「呈 藤森静雄様」と銘記された、恩地孝四郎の挿画本『海の童話』もありました。恩地自身の書いた文字を印刷した縦型の帯が現存しているのが珍しく、そこには「絵画はいつまで描写に虐げられてゐるのか」と宣伝文が記されています。作者による広告文はこの本の内容を端的に表しています。また各ページには恩地のイニシャル「K・O」の透かしが入っていて、特製の紙が使われています。恩地自身はこうした作品を「出版創作」と呼びました。『書窓』1936年5月で次のような文章を載せています。

「出版創作とは或は新語であるかも知れない。云う意味は製作の最初から既に出版ということが表現手段として撰ばれているものなのである。」「出版創作は今に始



若林奮《LIBRE OBJET V》
1971年
鉄・鉛ほか 当館蔵
*鉄の彫刻で知られる作者が吉増剛造の詩集「頭脳のパラダイス」を重く鉄の箱に組み込んだ本のオブジェ（リーブル・オブジェ）。 限定35部。

まったことではない。だがその数は恐らく余り多くはない。そして多くないのは当然だといえる。何故というに出版創作では、作者が出版過程のすべての仕事を熟知しそれを恰も自分のパレットの如く自在に使用し得なければならないからである。」「近代製版印刷術を使用する場合は、まず他の協力をまたねばならないし、又多数刊となると刊行者の協力をも要するわけである。蓋し刊行者との協和によって出版工程を用いて製作するというのが、近代的な出版創作であり、そして生れるものが創作出版物である。」

恩地は本作りのすべて（執筆、原画制作、装丁、印刷、製本）に創意を凝らそうとし、特に『海の童話』では刊行者の版画社、平井博と共に版画家として自刻木版画の新しい機械刷に挑戦したのでした。

本の様式を自らの表現として取り込んでいるアーティストは現代にも数多くいます。展覧会では、荒木高子（1921～2004）、加納光於（1933～）、若林奮（1936～2003）、藤井敬子（1957～）の作品を紹介しました。

また本作りそのものを美術として高めて

いるのが大家利夫（1949～）です。大家はフランスで製本（とりわけ箔押し技術）を学び、製本家の立場から本を構成する要素のすべての現場に関わって、画家や版画家、文筆家、デザイナー、印刷や版画工房のスタッフなどと共に、ひとつの場としての本の表現を高めることに心血を注いでいます。昨年、ロサンゼルス・カウンティ美術館で個展「大家利夫と完成度を極めた日本の装幀本」（Ohie Toshio and the Perfection of the Japanese Book, 2012.8.4～10.21）が開催され、日本に帰ってきたばかりの《シェイクスピアのソネット》などを紹介しました。

版画の複数性・実用性を表現の手段とした作家たちが本の表現を豊かなものに、本の世界はさらにさまざまなアーティストたちを刺激しています。そして情報を伝える媒体としてだけではなく、高められたイメージとでもいうべきものが既成のジャンルや日常的概念の境界を越えて形となったのを見た時、私たちはスリリングな美の感動を覚えるのではないのでしょうか。（井上芳子）



加納光於《アララットの船あるいは空の蜜》
1971-1972年
木・金属・ガラスほか 当館蔵
*詩人の大岡信と協働し大岡の詩を組み込んだ箱を限定35部の本として制作した。



大家利夫《書物の容姿》
1998年 革装 個人蔵
*フランスの詩人、ポール・ヴァレリーの著作を小宮正弘訳、柄澤齊による口絵版画と装丁デザインで制作。本文各ページに金箔が押されている。限定50部。



藤井敬子《朱色の》2008年 コラグラフ・革装 個人蔵 *版画の物語性と本の連続する空間を一体化させた作品。



大家利夫《シェイクスピアのソネット》
1995年 革装 個人蔵
*『シェイクスピアのソネット』（小田島雄志訳、文藝春秋、1994年）所収の山本容子の銅版画159点のオリジナル・プリントをまとめたもの。装丁デザインは渡辺和雄。限定12部。展覧会では山本容子が蔵書票をテーマに制作した近年の版画作品も紹介。山本さんはこの展覧会が始まる前日に和歌山県立医科大学で壁画を完成させたばかりだった。



図1 瑛九《旅人》1957年 当館蔵

瑛九(えいきゅう/1911-1960)は、戦前から戦後にかけて、油彩画、写真、エッチング(銅版画)、リトグラフ(石版画)と、ジャンルにとらわれず、独自の前衛表現を展開した画家です。開催中の「瑛九：紙の上の仕事」展では、写真や版画、デッサンなど、紙を支持体として制作された作品を、交流を持った画家たちによる同時代の作品とともに紹介しています。

多彩な表現方法を実践した瑛九ですが、エッチングとリトグラフの版画について言えば、ごく一部の例外をのぞき、1951(昭和26)年から1957(昭和31)年の間、およそ7年間で集中的に制作されています。さらにリトグラフについて言えば、そのうち最後の2年間、1956(昭和30)年から翌年にかけての間に160点近くが手がけられました。その熱中ぶりから、知人に重い「リト病」にかかっていると洩らす程でした。

今回とりあげる《旅人》(図1)は、瑛九のリトグラフ作品の中でも代表作といえる作品です。画面を見てみましょう。場所は葉の落ちた木々が立ち並ぶ冬の木立のようです。しかし、木々の前には白や青、黄や赤の色をした大小いくつかの風船状の物体が浮かび、その間を三角の頭に円錐形の体をした二本足の生き物のような存在が歩いているように見えます。具体的には説明のできない不思議な場面ですが、瑛九特有の幻想と詩情にあふれた作品です。

今回の展示では、主にフォト・デッサンと呼ばれる印画紙を使った作品と、エッチング、リトグラフと大きく技法ごとに3つの

コーナーで展示を区切りました。当然《旅人》はリトグラフのコーナーに並べるのですが、黒一色の表現から始まって、色を数色重ねた簡単な色刷りに移行し、しだいに複雑なイメージが生まれていく仕事の流れの中で、実は配置場所に非常に困りました。

もちろんリトグラフ約160点すべてを扱えた訳ではないのですが、それでも館蔵と個人蔵の55点ほどの中から作品を選び、配置を考えました。他の作品には、抽象的な形体の中にも似たようなイメージがあったり、色づかいに共通する感覚が感じられたりと、なんらかのつながりから配置が考えられたのですが、《旅人》だけはすんなりいきません。展示室の中で、同じ年に作られた他の作品と並べてみても、《旅人》だけが浮いているように感じられるのです。恐らくそれは、《旅人》が持つイメージの強さが原因です。似たようなイメージは他にもあるのですが、《旅人》に表された世界の強さと深さは、特別なものでした。

《旅人》が作家本人にとっても特別だったことは、本作が1957(昭和31)年に開催された第1回東京国際版画ビエンナーレに出品されていることから分かります。東京国際版画ビエンナーレは、国際的な版画の展覧会としては歴史が古く、国内的に言えば、規模の大きな版画の公募展としては、戦後最初のもので、日本の版画家たちは大きな期待と意欲をもって応募に臨んだはずですが、もちろん瑛九もそうだったでしょう。瑛九は、《旅人》ともう1点リトグラフを選んで出品し、入選を果たしました。

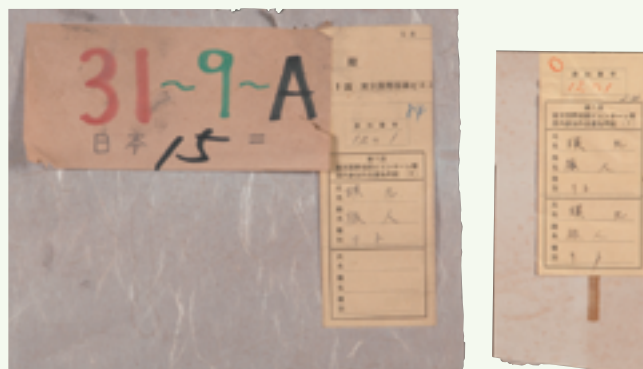


図2 瑛九《旅人》附属の出品ラベル

実は当館が所蔵する《旅人》が、さらに特別である理由がもうひとつあります。本作には、第1回東京国際版画ビエンナーレに出品した時のラベル(図2)が付属しており、まさに会場に並べられた作品であることが分かります。版画は複数枚同じイメージを刷ることができ、『瑛九石版画総目録』(瑛九の会、1974)によると、《旅人》は15枚の限定とされています。当館所蔵作には、イメージの左下にその番外で作家本人用の刷りを意味する「Epr.d artist」の文字が書き込まれていますので、15枚とは別に作家が自分用に刷った1枚であることが分かります。おそらくは、展覧会への出品用として念入りに制作したのであろうことは、想像に難くありません。

本作は、瑛九没後も遺族のもとに残されていたのを当館が譲り受けました。この時、《旅人》に関わる資料として、単色刷りの《旅人》(図3)も遺族より寄贈を受け、今回も並べて展示しています。どうぞ会場でご覧下さい。(宮本久宣)

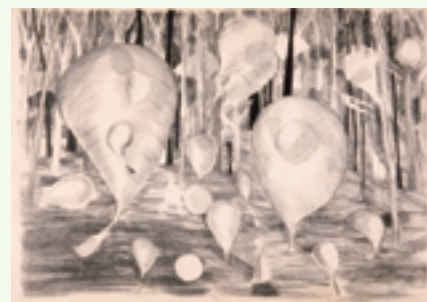
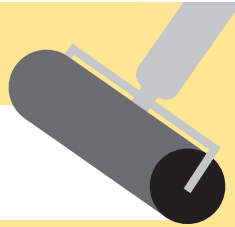


図3 瑛九《旅人》[墨刷り] 1957年 当館蔵



ワークショップ 「はじめての謄写版」から

謄写版は、パラフィンロウをひいた薄い和紙「原紙」をやすりの上におき、鉄筆でロウを除いて紙の繊維をあらわにすることで製版します。そしてインクをつけたローラーで刷ると、その紙の繊維の間の孔をインクが通り、印刷物が得られる印刷術です。1894(明治27)年に堀井新治郎親子が発売して以来、機械を動かす電力もいらない簡便な印刷術として、学校や職場、家庭にまで広く普及しました。そして「ガリ版」と親しまれ、明治、大正、昭和を通してもっとも身近な印刷術として生き続けました。

謄写版は、使用方法が単純で誰にでも扱えましたが、すべてが人の手によって行われるために、手がける人の技術と感覚によって仕上がりに大きな差が生まれます。しかし、このことがかえて謄写版印刷に携わる人たちの心を刺激しました。彼らは街の印刷工房にあって藁半紙とインクの匂いが懐かしい「ガリ版」にはとどまらず、タイポグラフィの開発や版画の制作にまで向かっています。

2013年3月16日、17日に企画展「謄写版の冒険 卓上印刷器からはじまったアート」展にあわせて、ワークショップ「はじめての謄写版」を開きました。1960年代以降、コピー機、ワードプロセッサ、パーソナルコンピューターが普及して私たちのまわりから謄写版が姿を消していったこの版式に、あらためて関心を持つ人がいらっしやるかと危惧しましたが、たくさんの参加ご希望がありました。資材と会場の制限があって、2日で30名を受け入れることがやっとなのが残念でした。

なぜワークショップを開くのか、その目的ははっきりしていません。歴史に埋もれていく技術が限りなくあるなかで、とくに謄写版をもう一度始めたいと思ったからです。大がかりな設備もいらないため、ひとりでも始められるだけでなく、この版式独自の魅力には、このまま埋もれられてはならない価値があるからです。独特な抵抗のあるやすりと鉄筆によって製版した線は不自由で、銅版のような強さはありません。「つぶし」によって作られる面には、木版のような明快さありません。しかし、その弱さを受けがえのない個性ととらえた人たちが、ほかにはない表現を実現しています。こころの震えをそのまま表せるかのような謄写版の力を知れば、すでに、デザインや版画制作の分野で、謄写版を選んだ人たちがいるように、これを自身の表現手法として求める人が必ずあらわれると思ったからです。

謄写版の印刷器や原紙は、1963(昭和38)年の中小企業近代促進法に於いて印刷所の機械化が進められたことで、1980年代後半になると、需要の乏しくなったために生産が中止され、手に入れることが難しくなっています。そのために、版式として魅力のある謄写版に親しむ機会も限られてきたのなら、いまは始められる手法を提示すべきだと思います。ワークショップではデッドストックや中古品が探せば手に入る、基本的な道具で試作ができるように、プログラムを作りました。

講師は坂本秀童子さかもとしょうどうじさんにお願ひしました。徳島県出羽島で謄写印刷工房を営んでいる方です。坂本さんは、第一次大戦

後、まだ技法書も出ていない頃に、徳島県の板東俘虜収容所のドイツ兵が独自の技法を編み出して作った印刷物の復刻や、映画の小道具の製作などにも協力しています。坂本さんの技法の特徴のひとつは、広く普及した謄写版印刷器のようにスクリーンで原紙を保護することなく、謄写版のはじまりの頃のように原紙に直接ローラーをあて、印刷するところです。はじまりを知れば、その後の改良は、かつての技術者たちのように自分で考えられるはずで

印刷器も、既製のものを使わず、厚紙を切り抜いて作りました。原紙とやすりは時間をかけて用意し、謄写版用の鉄筆のかわりになるものも探しました。銅版画用の道具のなかには、謄写版に使えるものもあります。かつて、銅版画家・浜口陽三がメゾチントを試作したとき、銅版画用の道具がなくて謄写版用の道具を使っていたように、代用、応用のきくものはいくらかもあります。

そしていま、「はじめての謄写版」が、始まりとなって試作をはじめた人たちが、作品をはがきにして送ってくださっています。ワークショップが、ただ楽しい一過性のイベントに終わらなかったことを知ることができたことは、なにより嬉しいことでした。講師の坂本さんにも、展覧会を開くために協力してくださった、謄写版の可能性を追求し続けた技術者の方々や、そのご遺族にも、喜んでくださるようご報告したいと思います。(植野比佐見)





当館ではゴールデンウィークにあわせて、フロアレクチャーや美術館の裏側を覗くことができるバックヤードツアーなどさまざまな催しを行っています。今年の「鑑賞ワークショップ」参加者の一人、和歌山大学大学院で美術教育を専攻する佐竹誠さんによるレポートを、一部ですがこの場でご紹介します。

コレクション展 2013 ー春
鑑賞ワークショップに参加して
4月29日(月)

鑑賞ワークショップとは、普段、美術館で観ている美術作品を、そこに何が描かれているか、どのような場面なのかといったことを、作品を前にして学芸員さんと対話しながら鑑賞していくものです。今回は「コレクション展 2013 ー春」に出品されている4点について、

学芸員の奥村泰彦さんと一緒に鑑賞しました。参加者は私を含めて5人でした。

鑑賞ワークショップに参加したのは今回が初めてで、学芸員さんの説明を一方向的に聞いていくものだと思っていました。しかし最初の作品、中村不折の《白頭翁》(1907)の前で、奥村さんが特に何の説明もないまま「何が描かれていますか？気づいた人から発言してください。」という質問をされたので驚きました。初めは意見があまり出なかったのですが、誰か一人が発言すると徐々に意見が出てきます。人物や周りの草花など、描かれているものに注目していたのですが、ある方が「描かれている人物が」森の中で裸でいることはおかしい。」と場面の違和感について発言したことから描かれている内容へと着目点が変わり、それによって人物の視線などにも気がつくようになりました。10分ほど対話したところで奥村さんが作品のテーマについて解説されましたが、参加者で出された意見はそれに近いものでした。

その後、石垣栄太郎《街》(1925)、川口軌外《少女と貝殻》(1934)、チャック・クロース《フィル》(1982)の3点を鑑賞しましたが、次第に参加者の方々が椅子から立ち、近くで見たり、遠くから見たりと、観ることに工夫をしていたことが印象に残っています。

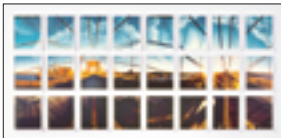
今回初めての参加でしたが、今まででなんとなく見ていた作品を違う視点から見ることができ、またほかの参加者の意見を聞きながら作品について考えることで深く読み取ったり、場面の展開を想像したりと、一人ではできない見方ができて鑑賞の幅が広がりました。1時間程度でしたが、とても充実した時間だったと思います。(佐竹誠/編:青木加苗)



Museum Calendar

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで) 休館/月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

なつやすみの美術館3「**美術の時間**」
7.6(土)～8.25(日)



佐藤時啓
Gleaning Light シリーズより《The Bridge》2005
学校はお休みでも、美術館では「美術の時間」が開講です。シリーズ3年目の今回は、タイトル通り「時間」がテーマ。作品の中にさまざまな時間のかたちを探します。

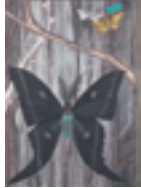
生誕120年記念 **石垣栄太郎**
9.3(火)～10.20(日)



石垣栄太郎
《街》1925

和歌山県太地町に生まれ、出稼ぎ移民としてアメリカに渡り、1920年代から40年代にかけてニューヨークを中心に活躍した石垣栄太郎(1893-1958)の生誕120年を記念し、その足跡を紹介します。

コレクション展 2013-夏
6.8(土)～9.1(日)



福田一穂
《羽化》1959

今回の展示では、「夏の便り」のコーナーを設けました。暮らしのなかで発見できる初夏から秋への季節の移ろい、生命のきらめきを作品のなかにも探すが、美術をより身近に感じていただくきっかけとなるでしょう。

特集展示**瑛九：紙の上の仕事**

6.8(土)～9.1(日)

戦前から戦後を前衛的な画風で駆け抜けた画家、瑛九(えいきゅう/1911-1960)が、版画、写真など、紙の上に表現した不思議で創造性に富む世界をご紹介します。

物質と美術 12.17(火)～2.11(火・祝)

美術作品を構成する物質は、ただ作品の素材であるだけではありません。作品がそうあるために必要な理由でもあります。物質という側面から作品について考える展覧会です。

版画について考える

2.18(火)～3.30(日)

『大阪朝日新聞』に特集「版画展覧会」が掲載されて100年、作り手の「自画、自刻、自摺」により、版画を近代的な美術作品と位置づけようとした創作版画、現代版画の問題を考えます。

コレクション展 2013-秋

特集展示 没後100年 **香山小鳥**
9.14(土)～12.1(日)

コレクション展 2013/14-冬

特集展示 **人間と宇宙のドラマ**：
吹田文明・堀井英男・長岡國人
12.17(火)～2014.2.23(日)

コレクション展 2014-春

特集展示**モノクロームの世界**
2014.3.1(土)～

その他

第67回和歌山県美術展覧会

I 10.31(木)～11.4(月) II 11.6(水)～11.10(日)

和歌山県文化表彰の歩み展 創立50周年記念
11.23(土)～12.8(日)

メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



友の会
会員特典
いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当: 松原